

倉本 聰

Sō

HURAMOTO

ニングル→倉本 聰

RIPON-SHA

ニノノ
nin-gura

著者紹介

昭和10年東京に生まれる。東京大学文学部美学科卒業。34年ニッポン放送入社。38年退社後、シナリオ作家として主にテレビを書く。代表作としてテレビ「文五捕物絵図」「赤ひげ」「前略おふくろ様」「6羽のかもめ」「うちのホンカン」「幻の町」「北の国から」「昨日、悲別で」他。映画「冬の華」「駅」他。著書「さらば、テレビジョン」「新テレビ事情」「新・新テレビ事情」「北の人名録」「いつも音楽があった」他。全集「倉本聰コレクション」全30巻。

第17回毎日芸術賞、昭和51年度芸術選奨文部大臣賞、昭和57年第55回キネマ旬報・第36回毎日映画コンクール・第5回日本アカデミー賞各脚本賞、第4回山本有三記念「路傍の石」文学賞、他受賞。



© Sô Kuramoto 1985 Printed in Japan

ニングル

一九八五年十二月 第四刷
定価／九八〇円

著者／倉本聰くらもと 聡

制作／小宮山量平

発行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五・一六

電話(03)二〇三・五七九一

郵便番号 一六二

振替 東京九一九五七三六

乱丁・落丁本はお取替えいたします
印刷・誠和印刷

倉本聰

あへん

SCENE I 7

SCENE II 23

SCENE III 43

SCENE IV 67

SCENE V 87

SCENE VI 113

SCENE VII 139

SCENE VIII 159

SCENE IX 179

SCENE X 201

SCENE XI 225

LAST SCENE 247

装幀・装画 小野州一

ニ
ン
グ
ル

SCENE I

その噂は何度か耳にしていた。

富良野市東部の大原始林。それは市の約60%を占め、富良野岳から十勝、オプタテシケ、トムラウシ、化雲、忠別と連なって大雪山系の山波を形成する。

殊に。

富良野市麓郷の背後に拡がるいわゆる東大演習林は、別名「樹海」の名で地元で親しまれる原始のままの鬱蒼たる森である。

噂はその樹海のどこか奥深く、人間社会から隔絶された場所に、ニングルという名の小人の社会が古来存在するというものであった。

その話を初めて僕が聞いたのは、当時麓郷で電機屋をやっていたチャバなる土地の青年からである。

演習林の林内夫として、山で造林の作業に従事する麓郷木材の山子（木樵り）さんたちには彼らの姿を見たというものもあるし、同社社長である仲世古のヨシオさんは、山で食べていたカップエビセンと交換に使い古したニングルの靴下を右片方だけ贈与されていて、これは僕自身も見せてもらったのだが明らかにキタキツネの春先の抜け毛を丹念に編み上げたものと思えた。

更に。

市内南扇山に住む通称井上のじっちゃんこそはニングルと直接交渉のある唯一の人間であるという説があり、それはじっちゃんが春先の山菜、秋のきのこの季節になると誰も連れずに山へ入り、殆んど半日で信じられない量のそれらの山の幸を持ち帰るからである。

山へ入る時じっちゃんは常に、南瓜の種と塩を持参し、帰りにはそれらが消えているこ

と。加えてある年大麓山の奥で山子さんの傍見した一人のニングルがピンクと紫の水玉のスカーフをまいており、それは明らかに井上のじっちゃんが永年着ていたスボーツシャツと素材を全く一いつにいつにしていて、あれはまちがいに山でじっちゃんがシャツを引き裂いてニングルに与えた、そういう説が村に流れたからで、事実それで降問題のそのシャツは裾の方が大きく裂けて無いのである。

僕はじっちゃんにきいたことがある。

ニングルは本当にいるんだろうか、と。

その時じっちゃんはいつものくせで、Mボタンを完全にはめ忘れていたのだが、ニタリと笑うやそのズボンをたくしあげ、

「いるとも云えん。おらんとも云えん」

禅僧のようにのたまったのである。

富良野に伝わるニングル伝説には、概略二筋の大きな流れがある。

一つは布礼別ふれべつから富岡とみおかにかけて古老の間に伝わる説で、それは彼らが穴居民族で、山の風穴を棲家すみかにしており、アイヌ伝説におけるいわゆるコロボックル、あの末裔であるという説。

今一つは麓郷ふもとから西達布にしちたふにかけての林夫の間に伝わるもので、ニングルはコロボックルとは種族を異にし、どっちかといえば木の洞ほらとか根の間の空隙を利用してかなりウツディな生活を営む、そういう小人だという説である。

更にこの二説を追求して行くと、布礼別説のニングルの体長はある者の説では二センチ

から五センチ。別の人の説ではせいぜい五ミリ。又ある古老の話すところでは彼らは見えぬ、と断定するわけで、住居に關しても風穴説に加え、いわゆるコロポックル伝説に見られる路の葉の下と云うものがいたりで、つまり極めて曖昧である。

それに対して麓郷説は極めて明快、かつ具体的であり、それによれば体長十五センチ程、平均寿命二百七十年、生涯に平均八人の子を産むが天敵であるところのヤチネズミに喰われて大体一人生き残ればいい方、と、誰にきいたか話が細かい。

扱。

この話をきいての僕の感想は、実は殆んど無いに等しかった。只、山里には成程今も、都会でしかないこのような噺が残っているものだなと感じた程度だった。

事態が大きく変化したのは、三年前の六月麓郷をゆるがしたヨシオさんの工場の火事後だった。その六月の正午出火した火は麓郷木材を全焼させた。火は午後二時頃鎮火したが、土場に積まれたおが屑に入った火は夜になってもくすぶり続けた。それでも山から運び出した木材は殆んど助かり土場の奥に眠っていた。その夜消防団員であるチャバ達は、殆んど夜を徹して土場を見廻った。

「知らん権利、って先生判るかい？」

チャバがそう云ったのはその翌日の夕方である。

徹夜明けのチャバの目は充血していた。

「知らん権利とはどういうことだ」

「きいたことないかい」

「初めてきくな」

「オラも生れて初めてきいたんだ」

「どういふことなんだ」

「よく判らんけど、つまり近頃よく云うっしょう。知る権利って」

「ああ知る権利は云う」

「それに対して知らん権利だ」

「チャバの体から煙の匂いがした」

「つまり——どういふことなんだ」

「うむ」

「チャバは何かを思考している」

「誰が云ったんだ、大体そんなこと」

「うむ。まア——ある者だ」

「ある者て誰よ」

「——」

「何か本にでも書いてあったのか」

「いやそうでない。直接云われたんだ」

「だから誰に」

「チャバはじいっと考えこんでいる」

この男は村では変人を通じている。変人でありかつホラ吹きでもある。だがしかしこの男は別の一面でひどく高度な感性を持っている。

「俺は電機屋だ」

チャバが急に云った。

「だから電気のことには詳しい」

「知ってる」

「ある男が——たとえば生れて初めて、電気とかそれからテレビってもんを見て、何だか判らんでポカンとしとれば、それは当然教えたくなるべき」

「だから教えてやるべと思って、これは実はテレビっていう便利な機械で、こっちに光ってる電灯と同じく、電気ってもんによってつくもんであって——そう説明しかけたらそいついきなり怒り出して、止める止めるそんなもん知りたかねえ。知らん権利だ、知らん権利だ、オラには知らん権利があるんだ！」

「そう云って、ま、えらいこと怒り出しちまって」

「そんな時はびっくりして呆然と見てたけど、後になってじいっと考えてみたら、成程オラたち今の世の中では、みんなが知る権利知る権利って云うからまア知ってもどうってことないことまでいっぱい、人が知つとるんだからオラも知るべって、知らんと何となく乗り遅れる気がして、遅れるのがイヤだから色々き廻って情報々々って追っかけ廻すけど、したっけ考えると知らん権利もあるんで、こっちはもうそんなこと知りとうもないからこれ以上余計なこときかせんで下さいって、そんな風に人に、人っちゅうかもつと、テレビ

や新聞やマスコミに対してもオラは知りたくない、教えてくれるな、これ以上きいてもあずましくないだけだわ、オラもう情報はなシもいらんから、今で充分満足しとるから、この先オラたちは知る権利よりも知らん権利を主張すべきで――」

風が森の中をざわめいて通った。

「オラの云うこと判るかい？」

僕は目を落し足元を見ていた。

徹夜で明らかにチャバは疲れている。疲れてはいるが神経が立っている。それに。火事の現場に出た消防士の殆んどが有毒ガスを吸いこむことから脳に多少とも異常を生ずると、そういう話を前からきいている。

「云うことは判るよ」

「判るかい先生」

チャバはギラギラと目を光らせた。

「一理あるべ先生、そいつの云うこと」

「そうだな」

「一理ある。オラは絶対一理あると思うぞ？」

「誰なシだ一体、そいつって云うのは」

するとチャバの目は更に光を帯び、憑かれたように顔を近づけた。声をひそめて、

「信じるかオラのこと」

「信じるよ、どうしたシだ」

「誰にも云わんか」

「云わんよオイどうしたンだ」

「オラ本気だぞ。本気で正気だぞ」

「判ってるよ。何だよ」

「逢ったンだ。マジに」

「逢った？」

「ああ、話した。本当にいたンだ」

「何が」

するとチャバ氏は大きく息を吸い、嘔くように云ったのである。

「ニングルだ！」

この文章を書きながら今、僕にはあの時のチャバの気持が判る。

諸氏は恐らく僕のこの文を、フィクションとして捉えておいでだと思う。筆者が何かある意図を以て、一つの寓話を書き出しているのだと、そう思われることは覚悟している。

覚悟しつつ猶かつ淋しさを感じる。

僕はUFOを見た男を知っている。しかし世間はその男を信じない。

僕は幽霊を見た女を知っている。しかし世間はその女を信じない。

科学は己れを超えてしまうものを殆んど傲慢に笑って否定する。かつて自らの先駆者であるところのガリレオ・ガリレイやコペルニクスが被害にあったその同じ否定を、今や加害者として他所者に叩きつける。